

第2回 子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議

ユニセフ 子どもネット ワーカー

▶第2回世界会議に集まった子ども・若者代表たち



◀本会議に先立っておこなわれたワークショップに参加する代表たち



2001年12月17日～20日、横浜で「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」がひらかれました。この会議には、136か国の政府代表、35か国から93名の子ども・若者代表をはじめ、3000人以上の関係者が集まりました。子ども・若者代表は、世界会議がはじまる前の14日から川崎で合宿生活を送り、いっしょにアピールをつくりあげました。本会議の最後で発表された子ども・若者代表による最終アピールに、会場は大きな拍手と感動で包まれました。

この会議に日本の子どもの代表として16人のユニセフ子どもネットワーカーが参加しました。代表となったネットワーカーたちは、8日間、いろいろな国の人たちと、時には涙をながすほどのげんぱし議論をし、時にはだきあい、全力で会議にとりくみました。

今回は、代表としてこの会議に参加したネットワーカーたちから、この会議についてそれぞれのテーマで報告してもらいました。

子ども・若者代表は何をしたか？

報告者：長谷川有望（17歳）

私は子どもと若者の声を届けるために、多くの国から集まった参加者と情報交換をしました。おたがいの国の現状、問題、対策など、貴重な話し合いができました。一言で子どもの商業的性的搾取といっても、地域によって問題のかたちは異なり、それぞれに合った対策をおこなわなければならないことを実感しました。私たちはおとなたちに何を伝えたいのか、どのようにアピールしていくか、子どもと若者の間で話し合っていました。

会話はすべて英語でおこなわれました。もちろん通訳が入っていました。子どもの商業的性的搾取を解決するという同じ目的を持ったなかまたちだから、言葉の壁はすぐに乗り越えられようと考えていました。でも、スケジュール通りにプログラムが進まなかったり、言葉のの違いで全員に内容が伝わらなかったり、やってみなければわからなかったことがたくさん起こりました。

そんな問題があっても関わらず、会議が成功したのは、参加者が子どもの商業的性的搾取の解決に強い思いをそれぞれ抱いていたからだだと思います。そしてその思いを、劇に、おどりに、歌に、言葉にして、私たちの方法で、世界に伝えました。この会議で世界の思いはひとつになりましたが、それでこの問題が解決したわけではないということを、しっかり受けとめなくては、と強く思いました。「みんなで考えた約束を、次は実行する時なのだ」

子どもの商業的性的搾取って何だろう？

報告者：網野合亜人（15歳）

もし、自分がいやがっているのに、毎日、薄暗い部屋でおとなに自分の体をもてあそばれたら...。もし、「お金をあげる」といわれて、こころないおとなにとられた自分の裸の写真がインターネットなどで世界中に広まり、ずっと残ってしまうとしたら...。もし、自分の体がお金で売られてしまったり...。自分の心も体も深く深く傷ついてしまいます。このように、子どもたちの体をお金で買って、心と体を傷つけることを、「子どもの商業的性的搾取」といいます。

子どもにはそんなことから守られる権利がありますが、今、その権利が守られているとはいえません。そこで、そんなことをゆるしてはいけない、という思いを持った世界中の人たちが集まって、6年前、スウェーデンのストックホルムで「第1回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」が開かれました。

その後、より多くの人がこの問題があることを知り、少しでもなくしていくと活動が世界中で高まりました。ある国では法律が作られて罪を犯した人をつかまえたり、裁いたりできるようになり、ある国ではこの問題についての調査がおこなわれ、被害を受けた子どもたちが心や体の傷をいやすことができる施設や仕組みが整えられたりするようになりました。

しかし、それから5年がたった今も、問題はまだ残っています。世界はどう変わったのか、これからは何をしたいのか、もう一度、世界中の人びとが集まって考え、話し合う場をつくらせようとして開かれたのが、「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」でした。そして、こうした世界会議ではじめて、子どもと若者が、世界からきたおとなたちと、この問題について、今までのこと、そしてこれからのことを話し合ったのです。

▶本会議中に子ども・若者代表が行ったラウンドテーブルには高円宮妃殿下やスウェーデンのシルビア王妃、ユニセフのキャロル・ペラミー事務局長も出席しました。



第2回世界会議で 子ども&若者代表が アピールしたこと

報告者：田代準之介（13歳）



本会議最終日に子ども・若者代表全員でアピールを発表しました。

- 会議で、子ども・若者の参加者がおこなったアピールのだいじな点として、次の4点があげられると思います。
1. 被害にあった子どもだけではなく、加害者のことも考えたこと
 - 加害者への厳しい処罰と必要な場合のリハビリをすすめること
 - 加害者がどうして子どもを性的に搾取するのか、くわしい調査によってその動機や背景をはっきりさせること
 2. 政府が積極的に参加することを要望したこと
 - この問題にかかわる国際文書を批准すること
 - 国内の法律を整備すること
 - この問題にかかわる活動に十分な予算を配分すること

この会議に子どもが参加したことの結果

報告者：田代竜太郎（14歳）

子どもの商業的性的搾取の根絶に向けて、子どもが参加することの重要性が認められた第1回世界会議から5年、第2回世界会議で、子どもが正式な出席者として参加することが実現しました。これは前例のないことで、会議の進め方も完全ではなかったけれども、採択された文書や、子どもによる具体的なアピールなどはどれも素晴らしいものでした。そのほかに具体的によかったと思うのは次の3点です。

- 1) 子どもの意見をおとなたちに伝えることができたということ。この問題の被害者は子どもです。同じ「子ども」の考えを伝えることができたのは大きな成果でした。
- 2) 国際会議に子どもがおとなと対等な立場で参加しているという、ほかとはちょっとちがった特徴がある会議だったので、マスメディアの注目を集めることができたのではないかと思います。これは、より多くの人にこの問題のことを知ってもらいやすくなったと思います。
- 3) 子どもによるアピールに、今後すべきことを具体的に書いたこと。

このアピールは国連子ども特別総会で国連文書となりました。今後の活動の大きな原動力になるでしょう。



あずま さやか 15歳

「世界会議に参加した感想」

私は世界会議に参加して、言葉と年齢の壁の高さを知りました。また、その壁を乗り越えることはかんたんではありませんでした。私たちは共通の目的を達成するために何度もぶつかり合いました。多くの異なる若者や子どもが集まると、まずおたがいのことを理解するだけでもたいへんなことで、みんなで目的達成のために話し合うことはさらにむずかしいことであることが分かりました。しかし、多くの異なる若者や子どもがそういう困難を乗り越えてつくったものすばらしさや、それが持つ力の大きさを知り、多くのおとなに大きな感動を与えるということも知りました。おたがいを理解し、言葉や年齢の壁がだんだん低くなっていくといいなと思います。そのために私はこれから多くの言葉を学び、多くの国の文化や考え方を学んでいきたいと思っています。

「会議に参加して感じたこと」

くろしま さやか 17歳

私の中で今回の会議はたいへん貴重なものとなった。期間中、起きているあいだじゅう、子どもの商業的性的搾取の問題に触れているというのは、搾取の経験のある私にとって大きな挑戦だった。また、言葉や文化、年齢、経験の違いからもめたことも多々あり、私自身、言葉の分からない中での話し合いは本当につらかった。けれども、子どもの商業的性的搾取という同じ課題に立ち向かう仲間である。試行錯誤をくりかえすことでひとつになり、子どもの商業的性的搾取根絶への新たな一歩が踏み出せた。子どもの商業的性的搾取はおとなにとっては一瞬の快楽だろうが、子どもにとっては一生の苦しみである。しかし私は、サバイバー(被害者)は、苦しみとともに痛みを知るからこそ問題に立ち向かっていける強さを持っていると思う。子どもの商業的性的搾取は根絶できるだろう。なぜなら、その根絶を望む仲間が世界中にいるのだから。

この会議に参加して感じたこと、考えたこと

私が会議に参加するまで抱えていた不安は言葉の壁で他の国の代表の子とうまくコミュニケーションがとれるかということでした。それが心配でたまたまなくて、言葉がなくても楽しめる割れないシャボン玉とか、いろいろな小道具をたくさん準備していったけれど、そんな物は必要ありませんでした。なぜなら言葉が少しくらい通じなくても、最高の友達ができただけです。アヌーはネパール代表の14歳の女の子です。彼女も英語を勉強中で、私たちは英語があまり話せないどうし、簡単な英語やジェスチャーや絵でおたがいの家族のことや、おたがいの国の言葉や文化などを教えあったりしました。仲よくなっていくうちに言葉以上に心で会話できるということが少しずつわかってきました。日本語でしか人と接したことがない私が、言葉ではないもので人と接したというのはすごく新鮮なことでした。そして私の中の何かが変わった気がします。「言葉が通じても心が通じなければ問題は解決できない」そんなことを私に気づかせてくれた会議だったと思います。

私がこの活動を始めたのは、あるテレビがきっかけだった。その日、女優の東ちづるさんがドイツの平和村を訪れた。平和村には、自分の国で戦争があり、地雷や兵器で傷ついた子ども達の身体と心の治療をするところだった。その時の映像が、私の心に「何か自分のできることをしたい」と思わせた。そんな時、母が「ユニセフ子どもネット」立ち上げの新聞記事を教えてくれ、私はすぐ参加した。学校の休みを利用して何回か勉強会に参加して、今こうして文を書いている私がいる。「横浜会議」を通して、国内だけではなく海外の人とも交流でき、「たくさんの仲間」ができたことが、自分のこれからの行動の道しるべとなつたし、自信につながった気がする。またもう一つの活動「エイズ撲滅」もこのことに関係していると知ったので、そのことにもがんばろうと思った。横浜会議代表者として、ユニセフネットワークャーとして、この活動がひとりでも多くのだれかの心に「行動」の灯をつけられますように。



やの ゆりこ 15歳

「心に投げ掛けられたこと」

なかわら かや 11歳



売られていく子どもたち サヌータのおはなし

サヌータが、生まれ育ったネパールの小さな村をはなれたのは2年前、13歳のときでした。山がきれいに見えるいつも真っ青な空に包まれた、うつくしい村でした。サヌータの家族は朝から晩まで畑に出て米や作物をつくり、サヌータの毎日は、家畜の牛の世話、小さな妹や弟の世話、水くみやまきひろい、食事をつくるてつだい、と休む間もありません。家族のくらしはまったく楽ではありませんでしたが、それでも、サヌータは家族とくらすのが楽しかったのです。

そんなある日、同じ村に住むおばさんがサヌータの家族に話をもちかけました。

「サヌータももう13歳になるよ。今さら学校に行かせるつもりもないなら、働き口をみつけたほうがいいよ。サヌータだってちゃんとお金をかせぐさ。仕事をしてお婆えればサヌータのためにもなるだろうし、あんたたちのくらしだって楽になるだろう。町に行けばいい仕事があるよ。紹介してあげてもいいんだよ。」

家族はサヌータを遠くへやるのは心配でしたが、同じ村の人の話だし、だいじょうぶだろうとかがえて、サヌータにこの話をしました。サヌータは、まだ行ったことのない大きな町がとってもすてきなののように思えて、いいよ、と答えました。おばさん



は、「サヌータがこれからはたらく分だよ」と、お父さんにいくらのお金をてわたしました。

サヌータが連れていかれたのは、インドの大都市ボンベイでした。期待に胸をふくらませていたサヌータ。その思いは最初の日に無残にひきちぎられました。

サヌータは、うす暗い家に閉じこめられて外に出ることもできず、毎日、つぎつぎとあらわれる見知らぬ男の人にいやらしいことをされる、じごくのような生活を送らなければならなくなってしまったのです。同じ家には、サヌータと同じくらいの年の女の子がたくさんいました。中にはサヌータとちがうことばを話す子もいました。

サヌータもほかの女の子も、どんなに泣いても叫んでも、だれもたすけにきてくれませんでした。それどころか、泣いたり逃げようとしたらすれば、ひどくなぐられました。

15歳になったころ、サヌータはとても具合が悪くなり、その家を追いだされました。サヌータはエイズという病気を引きおこすウイルスに感染してしまったのです。今、サヌータは同じような被害にあった子どもたちがいっしょにくらすセンターにいます。あまりにも悲しすぎて、サヌータはあの家にはいたあいだのことを話そうとしません。ただ、村に帰りたいたいといって、ときどき泣きま

す。でも、サヌータには村に帰る体力も、お金も、何も残っていません。そして、村に帰っても病気のサヌータは家族の重荷になってしまうことをサヌータは知っているのです。センターの先生は、そんなサヌータといっしょに、ときどき歌を歌います。そしてサヌータはきまって「もうわたしみたいな女の子がいないようにしてね」と先生に話すのです。



サヌータのようにだまされて、インドの都市で商業的性的搾取を強いられるネパール人の女の子の数は1年間に5000人~7000人にもなるといわれています。ユニセフは、子どもがゆうかいされたり、売り買いされたりしないよう、警察と協力したり、読み書きができない女の子にもわかるように歌をつかってメッセージを伝えたりしています。

ひとりでも多くの子どもたちが、自分の人生を自分の手でえらぶことができる日が来るように...。ユニセフも努力をつづけています。

